

曾野綾子作品選集

12

桃源社版



春草の夢

曾野綾子作品選集
12
春草の夢



桃源社

(検印省略)

曾野綾子作品選集 12	春草の夢	著者 曾野綾子	昭和四十九年八月二十日 印刷	昭和四十九年八月二十五日 発行	発行者 矢貴東司	印刷所 太平印刷社	発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目 十二番地	株式会社 桃源社
-------------	------	---------	----------------	-----------------	----------	-----------	-----------------------------	----------

(分) 0093 (製) 274001 (出) 5180

1974 ©

曾野綾子作品選集

春草の夢・目次

お家がだんだん遠くなる

この世の幻

夜の明ける前に

無為

視察の終り

椅子の中

青い蜜柑

箱を覗く

青い水差し

7

29

46

60

74

87

103

116

162

預言者の悲しみ

全滅

ママへの愛

新らしい牛乳屋

春草の夢

ミヒート

肥満

エトラルカ岬

解説 鶴羽伸子

285

270

258

247

235

229

209

196

174

装
幀

原

弘

曾野綾子作品選集

春草の夢

お家がだんだん遠くなる

1

種市萌春は、結婚の相手を探す時、仲人口をきいてくれるという同郷の夫婦に「おとなしい、静かな娘ならいい」と条件は一つしか出さなかった。種市は継母に育てられ、その継母が、一日中、口喧しく小言を言い続けているような人だったからである。彼女は勝気で、夫の商売のことから、家政のこと、継子たちの下着のことまで、何でも口出ししなければ気がすまなかった。そのお蔭で、萌春たち兄弟は、衣食に決してみじめな思いはしなかったから、今となっては感謝すべきなのかも知れない。

種市はその後、世間的にどうみてもあまり聞えのよくない私大の経済学部を出て、やはり郷里の関係者の口ききで、社員三十人ほどの、冷暖房機を扱う会社の経理へ就職した。会社と言えば聞えがいいが、個人商店のようなものである。社長自身が、腕と勘のいい職人で、若い者で解決

つかなくなると、自分から現場へ出て行く。社長の弟というのは、ぐうたらで、殆んど何の才能もないのだが、それだからこそ社長は、どこと言って行き手のない肉親を、会社の専務の役につけ、態のいい電話番号をさせているのである。無理をすれば、もう少し世間通りのいい会社へ就職できるかも知れなかった。しかし、背のびをしてみたところの後が知れている。重々しい会社ほど、学歴のばつとしないものは屑のように扱われる。

事実、種市は、賢明な選択をしたと言えた。小企業は、激しい肉体労働をしなければならない労働者のようで、年中、ボキボキ骨を鳴らし筋肉を締め上げているような苛酷さはあるが、確かに人間関係には幾分単純な爽かさが残っているのだろうと思う。多少愚かしくはあっても、陰湿ではないように、種市には思えたのだった。

種市は、その意味では地味ではあったが堅実なスタートを切ったのであった。今から十五年ほど前のことである。その当時会社は、主に小さなビルの暖房とか、石油ストーブの製造販売をやっていたのだが、この商売は、その頃がスタートラインにいたので、年々、扱い高は殖える一方であった。最近では、ちよつとした個人住宅でも、冷暖房空調設備をつけるところが多くなったから、職人の不足とあいまって、仕事は手が廻らないくらいになった。社長はい

つも現場をとり廻つていて、たまに帰つて来るものがあつてもジャンパーを着たままだから商用に來た客は会社で背広を着た種市をよく社長と間違へることさえあつた。すぐ傍に社長の弟の樽美長雄専務が坐つてゐるのだが、種市を社長かと思うのである。ということは、種市が、年より多少ふけていたということもあるし、人間の器量の点で、実際に仕事をしている種市に重さが滲み出ていたのかも知れない。樽美長雄は、無責任で愚鈍だから、そのような何気ない情景の持つ些細な意味などわかりはしないだろう、と種市は高を括つていたのだが、実は後でそうでないことがわかつた。男は仕事の能力に於て自分より勝る人間に対しては、ひどく鋭敏だし根本から許さないものである。樽美専務は愚鈍なりに、有能な「他人」の種市を深く怨んでいたのである。

しかし十五年前の種市には、勿論、そんなことは一切見えていなかった。種市はあらゆることにおいて、人並みな境遇になることを望んだだけである。

暖い家庭の味を知らないのだから、結婚は早いほうがいいと考へてゐた。継母のようないわけゆる遣り手タイプの女は真平である。種市は妻というものを考へる度に、いつも糸つむぎをしている聖母の姿を思つた。それは有名な画なのだろうが誰が描いたのか種市は知らない。マリアは伏目

がちである。遠くに山が見える。足許に百合の花が咲いてゐる。

もしこの光景から女、すなわちマリアがいなかったらどうなる。画は重心を失うだろう。男の聖母崇拜など、あまりにも型通り過ぎるけれど、種市は、妻というものを「静かに空間を満たすもの」というふうに考へてゐた。そしてついでに種市は、それは、それほど高望みの条件でもないだろう、と思つた。美人でなければ困る、というのでもない。家柄や財産を狙うのでもない。只静かな女を、と言うのだ。

最初に紹介されたのは、幼稚園の保母をしてゐた、という娘だつた。白いブラウスが卵色のセーターの襟に初々しく映えており、その上に、小麦色の肌の健康そうな微笑があつた。

「こういうのを健康的でいいというんだろうな」

と種市は秘かに考へたが、それはつまり、彼自身としてはそう思へぬ、ということであつた。種市はこの女の、男のような濃い眉を見ると、何となく胸がむかむかした。眉の濃い淡いは、決して彼女の責任ではないと知りつつも、何となくいやなのであつた。

それでも種市は慎重な商人だつたから、ともかく相手を値踏みするために、交際を始めた。娘は、てきぱきとした

調子で、家庭がいびつなために、集団生活に入りにくい子供を、どうして群の中に引っぱって行くかについての苦勞話などをした。明るい生き生きとした喋り方であった。それだけに却って種市は、その話を迂散臭く感じた。彼女が決して自慢話をしているのではないということがわかって、いるだけに、余計、種市はやり切れなかった。

この縁談は、結局、両方から破談になった。

次に持つて来られたのは、パーマメント屋に勤めている娘だった。髪結いの亭主になるかと思うだけで、種市の自尊心はひりひりした。俺は女房の経済力など、当てになんかせんぞ、と種市は心の中で自負した。この娘とは、会わない前に断った。

三度目の正直が、今の妻の登志子であった。

「とくにどうっていう娘さんじゃないんだけどね。父親はガラス屋でね、地道にやってるし、当人は今時の娘としちゃ、珍しく家事も仕込まれてるっていうから、まあ、あまり期待せずに会ってみたら、どうかと思って……」しかし、種市は期待し、予感していた。会ってみると果して娘は、殆ど何も喋らなかった。

「映画は、洋画と邦画と、どちらが好きですか？」

種市がきくと、目鼻立ちも、万事うつすらと控え目な、色の白い、瘦せぎすの登志子は、

「どちらでも」

と蚊の鳴くような声で答えた。二人は二時間あまり話したが、種市には、仲人から告げられた以上には相手のことは一向にわからなかった。しかし、種市は却って、何もわからないことに惹かれたのである。種市はチャンバラ映画が好きだったが、あの幼稚園の保母は、そんな映画は低級だと莫迦にしそうだったし、パーマメント屋の娘は「私、フランスの恋愛映画がいいの」と言いそうだった。種市の空想の中で「はい」とついて来そうなのは、この登志子だけだった。そう思うだけで種市の登志子への思いは燃え上った。彼は仲人に気に入ったと告げ、翌日にはもう相手からの返答を聞きたい、と早急に催促した。ガラス屋の父親は渋ったが、仲人が、朝と晩に一度ずつ電話をかけてくるのには、半ば閉口し、半ばその熱意に応えねば、バチが当りそうな気がし始めた。

登志子の父親から、約束をとりつけると、種市は半年目に式をあげた。種市はお体裁屋ではなかったから、登志子の家の近くの、小料理屋の二階で、形ばかりの披露をするだけに留めたいと言い、種市の側から出席したのは、樽美素吉社長と、郷里の父と、東京で就職している弟一人だけだった。登志子の方も、友人は一人も招ばなかった。ホテルで披露をしないから招ぶのは恥かしいと思っているのだ

ろうか、と種市は氣を廻したが、それらしい様子もなかった。登志子は大人しい娘なので、特に親友らしいものもなく、従って、結婚式に来て貰いたいような関係の友達は何人もないということらしかった。

ガラス屋の親戚は、十人以上来たが、社長は彼らの前で、如何に自分が、種市に頼っているかを披露した。「会社は儲っている時こそ危険だと思ふ。不景氣な時こそ、勇氣を持たねばならないと思ふ。その二つの波をつなぐものは、誠実一つである」というような話だった。これは社長が普段よく会社で垂れる訓戒であつたが、初めて聞く人々には、實際的な商売上の一つの指針にもなりそうだととして評判がよかった。

結婚が決ると同時に、種市は、早速、公団アパートの申し込みをしたが、幸運にもたった一回で、江戸川区のD町アパートの2DKに當つた。これは信じられぬような運のつき方であつた。

結婚してみると、登志子は種市の想像通り、ひどく口数の少ない女だった。しかし決して頭が悪くはなかつたし、服装のセンスも野暮ではなかつた。ただ、登志子には冗談というものが殆んど通じなかつた。テレビを見ている時、ギャグに出会つても悲劇のクライマックスにぶつかつても同じような表情で受けとめていた。もつとも種市も冗談は

総じて無駄なものだ、と思つていた。彼女は時々、けろりとして、

「お父さんが、お前みたいな、わけのわからん女をもらふ奴がいたもんだ、って言つたわ」

などと言うこともあつた。

「お前のお父つあんは、下町育ちで口が悪いからな。身内のこととなると、痛烈なのさ」

種市は受け流していた。

2

何もかも、自分ひとりで、この生活を手に入れたのだ、ということが種市の誇だった。親の家から、学費ときりきりの生活費こそ出してもらつたが、就職も当てにはしなかつた。初出勤に着て行く背広さえ買つて貰いはしなかつた。結婚の時だって、実の父は祝いに五万円くれただけである。

アパートは住んでみると収納のための面積が少なすぎて、何となく狭苦しいが、種市は小さなヴェランダにさす陽ざしまで、自分の力と働きで手に入れたのだと思えば、満足で鼻孔がふくらむような思いだった。

登志子も体のために動く女で、鍋という鍋はいつもびかびかに磨いてあるし、蒲団も手まめに干している。という

より、ヴェランダに陽がさしている限り、日光を蒲団で受けとめなければ損をする、と思うらしいのである。種市は夜、登志子が卓袱台の上に、算盤と家計簿を拡げて、眉間に軽い縦皺を寄せながら、一日の出費をチェックしている姿を、かなり好ましい光景だと思いながら見ていた。登志子は、内気なように見えていて、実は時々かなりけろりとした所があることが発見されて、種市をぎよつとさせたり嬉しがらせたりした。たとえば家計簿の出費の欄に「生理帯」などと書いてあると、種市はやはり生々しい思いで、何となく平静ではいられないのである。「葉屋払い」とでも書いておけば、何の葉を買ったとまでは追求しないのに、登志子は正直なのか、羞恥心がないのか、きわめて実際的である。

種市に、妻の性格を一言で言えと言え、彼は「生真面目」と答えたであらう。

或る日曜の午後、種市は妻とぶらりと散歩に出た。公園を散歩した後、駅前のマーケットで、夫婦は夕食のおかずを買って帰ることにした。

「肉にしますか？ 魚にしますか？」

登志子は尋ねた。種市は普段は脂っこいものが好きだったが、その日は暑い夏の盛りで、何となく胃がもたれるような気がしていたので魚にしようと提案した。といつて

も、種市はかねがね、食物には淡泊なほうで、特に食べた魚がある訳ではなかった。只、彼は煮魚が好きで、何の魚の切り身でも、只、甘塩っぱくこつてりと煮つけばいいのである。

魚屋の店先には、斑瑯引きの器の中に、氷に漬った黒い小さなカレイがあった。魚屋はそれを目板ガレイだと言った。

「おいしい？ この魚」

登志子は尋ねた。

「ああ、おいしいよ。あつさりしてて、うまいよう」

魚屋は節をつけて答えた。種市は脇で、今の妻の質問は全く無駄ではないか、と考えていた。自分の店の魚がまずいという魚屋はあり得ないだろう。しかしいわずその会話は、客と店員との間の、社交に似た無意味なやりとりだろうという点では納得できたので、彼は黙っていた。そして登志子とそのカレイが比較的、生きがいい上に値段も安かったのも、手頃の大きさのを二匹選んで買うのを、じっと見ていた。

その夜、夫婦はさし向いで食卓に就いたが、登志子の煮たカレイを一口食べて、食事にはあまり文句をつけない種市が箸を置いてしまった。魚の身はばさばさしていて、だらけのようであった。

「どうしたの？」

「いや。この魚はひどくまずいぜ」

「味つけ、普段と同じ筈よ」

「いや、魚がよくない」

「腐ってはいないでしょ」

それなら食べられる筈だ、と言外に匂わせて、登志子も一口食べたが、やはり腹立たしげに、箸を置いた。

「ひどいわね」

「場違いなもの、とかいうのがあるじゃないか。きつとあれだ」

魚について無知な種市は言った。

その夜、夫婦にとって更にこの事件を不愉快に思わせるちよつとしたおまげがついた。テレビが、政界と財界の老人たちの気の張らない座談会のようなものをやっていたが、その中の一人がたまたま夏のカレイについてふれたのである。

《そりゃ、いかん。夏のカレイなんぞ買っちゃあだめだ。

夏のカレイの不味さは猫またぎと言うくらいだからね。猫も食わずにまたいで通るくらいなんだ》

種市は自分がそのような知識を持ち合わさなかったことについてうつすらと腹をたてながら黙っていた。登志子もその座談会を聞いている。種市は、魚がまずいので、食べ

ないで捨ててしまったのだが、登志子は勿体ないと思ったのだらう。無理してきれいに食べ上げてしまったのだ。その挙句が猫も食べない、などと知らされたのだ。

種市が男として、この問題を忘れられたのは、結局のところ、知ったかぶりのエリートたちを、心のどこかでバカにできたからである。第一、カレイにもさまざまなかレイがあるだらう。連中は金があるから、平素うまいものばかり食っているつもりなのだらうが、たかがカレイに、そうそう通ぶることもない。

たまたまその翌日、種市はなしくずしの夏休みをとって、連休にしていた。金も惜しいし、皆が歩く時に、海や山へ行くのも愚かしく思えた。種市は「人並み」に身を置いてその快さを充分に味わいながら、ちよつとは「人並み」でない部分が自分に欲しいのであった。

彼は殆んど何の趣味らしいものも持ち合わせなかったが、自分の周辺を——今の場合はアパートの部屋を——何とか少しでも住み心地よくなるようにすることに多少興味があった。彼はこういう休みの日には、部屋に寝転んで、あそこに棚をつれば、あそこに新たな空間ができ、そこにどんなカーテンをとりつけ、ヴェランダのどこに鉢植えを置けば、空気に緑の匂いがするだらうなどと考えていた。それは結構いい閑つぶしで、一、二時間はあつという間に

過ぎた。まだマイ・ホーム主義などという言葉はない時代だったが、種市はそれが懦弱な思想だと言われても、何ら痛痒を感じなかったであろう。人生とは、懦弱と渾沌そのものであり、そのような夾雑物がなければ人間は土を失った植物のようになるであろう。第一、こうして、他人が働きに行く日に、じつと家にいられると思うだけで、種市は満足で、彼はアパートの上下左右の、単調でいて、意味ありげな物音をじつともの珍しく聞きながら、ささやかな果造りの楽しみを味わっていたのである。

午後になると、彼はこれも趣味で十五分ほど離れたところにある、新築の銭湯へ妻を誘った。

「温泉気分を味わって来ようじゃないか」

彼は言った。それから彼は決して反対しない妻を快く伴って家を出た。登志子は帰ってくるとアパートの玄関でサングラスも脱がずに言った。

「お財布を持って、もう一度買ひものに行きなおいしてもいいかしら」

「ああいいよ。どこへ行くんだい」

「魚さんへ行きたいの」

「そうだな、昨日うまいのを食べ損ねたからな」

結局、夫婦は、又、階段を下りて魚屋へ行くことにした。種市の胃は、一日休んだためかすっかり軽くなり、今

日は、天麩羅を食べようかと思うほどになっていた。

魚屋の店は、細い路地の入口にあった。ガラスケースの中には、天麩羅用の穴子などもあって、値段は高いのかも知れないが、種市の食欲をそそった。

「昨日の、カレイ、あれまじかったわよ」

登志子は、若い店員の顔を見ると言った。

「そんなことないでしょう。生きはよかったよ」

「旬でないのを売ったんじゃないの。どうしておいしいなんて嘘をついたの？」

「どうしてって、前日、オレ食べたなら、うまかったからだけどさ」

「嘘はつかないで頂戴。テレビだって言ったわよ。夏のカレイなんて売りものにならないって。あんたの店は客に、売りものにならないような商品を売るの？」

テレビは「買うものじゃない」と言っていたのである。

種市は下らなく思い、その会話を浅ましく感じたのだが、止めようもないままに、自分は関係のない人間なのだ、という顔をして、表通りを見ていた。

「まずいまずいって、奥さんは言うけど、証拠はないじゃないか」

店員もむつとしたように言った。

「いいわよ。あんたの店なんかでもう買わないから」

種市はまごまごしていた。彼は幾度か、妻とは別に、自分分は店へ入って穴子を買おうかと考えていた。しかし登志子の目の色を見ると、それは決して許可されそうにないことだということが種市にはわかった。登志子の顔は堅く引きつっていた。

「あんな魚屋で、二度と買ってやるものですか」

登志子は表通りへ出ると吐き出すように呟いた。あんな魚屋でも、こんな魚屋でも種市はどうでもよかった。カレイを選んだのはこちらなのだから、今度からは氣をつけてまずい魚を買わないようにすればよいのである。彼は妻が、商人を道徳と結びつけて考えているのにびっくりしていた。種市にとって商人はお互いの便法のために存在しているだけである。

「今日は、お肉にするのよ」

登志子はまだ頬を引きつらせて言った。すると反射的に、種市の胃の腑からは、微かな嘔吐に似たものがこみ上げて来た。

3

種市は、二年目に長男が生まれた時、これで夫婦は一応安定したと、感じた。とは言っても彼は決して、それ迄に、登志子と離婚を考えた訳ではなかった。只、子供が生まれ

れば鎖がはまったようなものだと考えたのである。その後には、時々、登志子の見せる不気味な面が、種市の心に灼きついて残っているのだが、無論、種市は、そんなことが離婚の理由になどなる訳がない、と思っている。又、実際、登志子は、他の点では、よくできた女なのである。

赤ん坊は四キロちよつともある大きな子だったが、実家の母親さえ一足おくれで間に合わなかったほど順調なお産であった。種市は、子供に豊太郎と名づけた。種市豊太郎という字面から受ける印象は少し古風かも知れないが、万物が繁茂しているさまを思わせる。

何十と並んでいるアパートの室の一つに、又もや、子供が生まれた、という最も平凡で偉大なできごとが一つ起きただけなのであった。二人は全く人並みな親たちだった。

赤ん坊が少しお乳を吐いただけでおろおろし、お腹が痛い、というだけで盲腸ではないか、癌ではないか、とさえ氣を病むのだった。

登志子は、豊太郎にかかり切りになり、子供にいかに、清潔で乾いたさっぱりした衣服を着せ、栄養の満遍無く行きわたったものを食べさせ、外氣にふれさせて育児書に書いてある通り、理想的な状態で育てられるかに夢中になっていた。そして種市も「子供は自然に育てりゃいいんだ」と言いながら、やはり登志子のやっていることを、心の中で